

曲 目 解 説

新しい耳シリーズ Vol.8 ~ シンプル, ミニマル&ヴィジュアル ~

シンプルといえば、まず、打てば響くという太鼓の醍醐味を生かした、**シックス スリック スティックス クリック リックス**です。曲のタイトルは、語呂合わせのようでなかなか掴みづらいものですが、Slick=すべすべした物質、Stix=sticks(ばち) Click=(馬などをせき立てる)シツという音、Lick=即興演奏の一節、といった言葉から来ています。曲そのものは「3台のスネアドラムのための楽しみのフーガ」という副題が示すとおりフーガ形式を基本に作られており 一人1台のスネアドラム(小太鼓)から、鼓面、リム(縁)を打った音、そしてスティックどうしをぶつけた音を打ち出し、声と身振りも合わせた作品です。限られた素材からどのように音楽が紡ぎ出されるか、単純なようで実は難しい表現力を要求されるこの作品の作曲者は大学で楽理と作曲を教えており、1991年の作品です。

小太鼓3台のみというシンプルな楽器編成の曲の次は、向かい合ったマリмба2台による **ピアノ フェイズ**です。シンプルながら、ミニマルミュージックの代表としてテリー・ライリーの「インC」と共にあげられることの多いこの曲は1967年に作曲されています。16分音符12個からなる基本パターンを片方は固定パートとして、相方は同じところから出発しながら少しずつテンポを速めて最終的にはまた同じところに戻る形で曲は終了します。電車の踏切の警報で聴くことが出来るモアレ現象と同じプロセスです。最初のパターンの12音はその気になれば片手で弾けてしまう音型ですが、左手で3音、右手で2音を左/右交互に演奏するのは打楽器の発想だと思います。一言一音に注意して聴いて下さい。楽譜は、ピアノまたはマリimbaによって演奏するように指定されており、作曲者によりそれぞれの場合の配置等が指定されています。また、タイトルを「マリimba フェイズ」とする場合もあります。作曲者による フェイズ シリーズはいくつかありますが、乾いた響きのこの作品に比べ、よりウェットな響きがする「ヴァイオリン フェイズ」もあります。また、「六台のピアノ」はこの曲と同じく六台のマリimbaで演奏されることが多く、私たちの次のライブ作品は、「六台のマリimba」か「ドラミング」となるでしょうか。

耳で聴く音楽の後は体で感じたいというあなたには、**ガンキノココ**をどうぞ。ブルガリアに伝わる民謡で、2人のマリimba奏者と1人のドラム奏者のために編曲されています。愛らしいダンスミュージックで、カップル達が隣り同士腕を組み、円になったり列をなして踊ります。特徴あるリズムと旋律を持ち、特にそのリズムパターンが、2+2+3+2+2に分割され、3拍子の頭に軽いアクセントがついているのが典型的なブルガリアの民族舞踏音楽を表しています。編曲者はブルガリア生まれで現在ドイツで活躍している女性です。

シンプルという言葉には隠された意味「繰り返しもあります。打楽器そのものがプリミティブな楽器であり、またデジタル時代を反映してか、打楽器音楽には繰り返しの多い作品もあります。ドイツの誇る打楽器界の大御所ジークフリート・フィンの **トリオ オリエンテ** は音楽がヴィジュアルです。1人で幾種類もの楽器を扱うこの曲は、繰り返しも多用しながら様々な空気を漂わせます。中東のオマーン湾に沿うDidda, Khor Fakkan, Kalbaの3つの都市、これらの小さな港に商船が各国から入り、いろいろな文化がもたらされ、混ざり合った文化が作られてきました。5つの曲からなるこの組曲は、3つの都市の名を付けた3曲と、その間を橋を架けるように結ぶ瞑想的な間奏曲からなっています。繰り返しもは瞑想的な気分にもさせるものです。

その気分を太鼓の大きな音が破ってしまいます。**リフト- オフ!** は、3人がそれぞれ大太鼓を含む3台の太鼓を演奏します。始まりの低音のドロドロはなにやら神秘的で緊張感も漂わせます。シンプルながら大きな太鼓と打ち合うヴィジュアルな面も印象的で、最後は最低音の16分音符ffff連打で終わります。(ここで休憩をどうぞ)

後半は、ビジュアルにカラフルに **ボーダー クロッシング** からです。作曲者はこのタイトルを、北米に生活する人間として南方の文化に接した時の体験を反映させた、自伝的な要素も込めて「ボーダー クロッシング (異種交差、境界の行き来)」と説明しています。そこには彼の音楽観である現代におけるクラシック音楽とポピュラー音楽のスタイルを混合するという意味も込められています。1984年のある日の午後、コスタリカはサンホセの下町を歩いていた作曲者は、ブラジル風サンバを太鼓と鉄琴で演奏しながら行進しているところに出くわしました。後の1987年に、軍隊がなく平和に満ちたその光景が2年間暮らした国にふさわしい風景として思い出され、打楽器アンサンブルのために作曲しました。曲の最後にサンババンドが登場し最高潮となります。

打楽器アンサンブルにはマリimbaアンサンブルという分野もあります。ドイツでの **ウェスタン スケッチ**は、馬泥棒、壮大な大平原、ロデオの3曲からなり、1949/50年の作品です。作曲者はシェーンベルグにも作曲を師事しています。

再び、打楽器のみのシンプルな作品、**7重奏曲**です。1981年に作曲されボンゴとティンパレスを中心に五つの楽器が加わったこの曲は、ミニマルミュージックとは違うものの繰り返しの音楽です。4小節の簡単な動機が示されたあと、それを16小節のテーマとし様々な変奏を加え進んでいきます。楽譜には凡音もあるものの淡々とした表情で流れていきます。

打楽器の作品にはボディ(身体)パーカッションなど「楽器」を使わない作品もあります。**アイネ クライネ ティッシュム** **ジーク**は、モーツァルトの名作「アイネ クライネ ナハトムジーク」をもじったタイトルですが、内容は「ご飯です！」で始まる欠食児童? 4人のテーブルを使ったパフォーマンスです。単純な素材の組み合わせながら、運動量が多く、見た目より演奏が大変な曲です。

最後は、**マリimba四重奏のための気晴らし**です。いくつかのパターンの繰り返しの中から旋律が浮かび上がり流れていく1994年の作品です。ミニマルのような「漸次的位相変移プロセス」は持たないものの、同じ音・似たパターンの繰り返しも多用され、最後は息が途絶えるように消えていきます。いろいろあった演奏会でしようが、気晴らしになったでしょうか。(ひ)